

I 着任にあたって

杉浦 幸之助

2013年8月1日より、極東地域研究センターに着任いたしました。これまでは、アラスカ、シベリア、モンゴルなどの北極ツンドラ域から北方林域、国内は北海道、東北などの雪氷圏をフィールドとして、現地研究機関との協力を得ながら、異なる気候帯における雪氷変動の実態把握と変動メカニズムの解明に関する研究に取り組んで参りました。



写真1: 寒極と呼ばれるロシア・オイミヤコンで雪氷観測

私自身のこれまでの研究分野は、雪氷と呼ばれる分野です。この雪氷に関して、昨年度は3つの大きな出来事がありました。2012年6月は、北半球を覆う積雪の月別平均面積が6月史上最小記録となったこと、続く7月にはグリーンランド氷床表面のほぼ全面が融解したこと、さらに9月には北極海海面積が最小記録を更新したことです。一方日本では、北日本日本海側を中心に、気象官署とAMeDASの合計330地点のうち、12地点で最深積雪記録が更新されました。雪氷に関しては昨年度、このような顕著な変化が観測されたのです。

雪氷は身近な現象でありながら、地球スケールで他の研究分野とつながっており、植生、土壌、大気、気象、気候、海洋、生態系、水循環などの各研究分野にまたがる分野横断的な領域です。経済や社会にも関わってきます。気候変動に関する政府間パネルIPCC第5次報告書第1作業部会報告書(IPCC WG1 AR5、現時点 Final Draft)にも記されているように、近年の温暖化は多面的に自然環境や社会環境に大きな影響を与えることが懸念されています。それらに対し、しっかりと腰を据えた丁寧な研究活動からの学術的知見を提示していくことが必要だと思います。今後は、北極から日本に連なる寒帯・亜寒帯・温帯・乾燥帯へ

とそれぞれの気候帯が凝集された地域のひとつである北東アジア地域に着目し、大きな影響が懸念されている生態系を含む雪氷環境の変動を鳥瞰して、多角的に取り組んで行きたいと考えています。海外研究機関との協力関係を今後も保ちながら国際的な研究活動も継続しつつ、立山を有する富山での地の利を活かしたフィールド観測など、有効な手法を積極的に取り入れていき、学生とともに柔軟に、広い視野をもって取り組んでいけたらと考えております。

(文責:杉浦)

II 「共鳴する東アジア」成功裡に開催

富山大学・極東地域研究センターと読売新聞北陸支社の共催で、去る5月25日～6月22日の毎週土曜日5回にわたって「共鳴する東アジア～自然と経済の視点から」という公開市民講座を開催しました。時節柄か開催日に急に気温が上昇したり、大雨が降ったりという悪条件もありましたが、毎回100～150の方が講演を熱心に聞いて下さいました。このうち5回総てに出席して下さった方が39名で、その方々には皆勤の賞状と読売新聞社からの記念品が贈呈されました。また今回の市民講座は県民カレッジとの連携講座としたので要件を満たした方には単位が認定されました。



写真2: 今村センター長による講演

北東アジアは現在良い意味でも悪い意味でも注目を集めている地域であり、富山とも関係深い地域です。またグローバル化(全球化)は経済ばかりでなく、環境問題でも顕著ですが、とくに国土が隣接している北東アジアでは関係性は緊密です。今回の市民講座ではその北東アジアを経済と環境の両面から、センターの教員(元も含む)が講演したものです(講演日と題名はCFES Newsletter No.10に既報)。講演内容の詳細は各々の講演の3～4週間後に読売新聞に掲載されていますので、ご覧いただいた方もいるのではないかと思います。毎回質問も多数あり、時間が足りないほどでした。



写真 3. 公開市民講座の様子

これからも極東地域研究センターでは時宜に適った題目での講演会を行ってまいりますので、ご参加いただければ幸いです。

(文責:今村)

III 第 5 回スラブ・ユーラシア研究・東アジア・コンファレンス参加記

第 5 回スラブ・ユーラシア研究・東アジア・コンファレンスが 2013 年 8 月 9-10 日に大阪経済法科大学大阪八尾駅前キャンパスで開催されました。このコンファレンスは、日本のスラブ・ユーラシア研究のナショナルセンターである日本ロシア・東欧研究連絡協議会(JCREES)と中韓印の関連学会が協力して開催される国際コンファレンスであり、国際中・東欧研究学会(ICCEES)認定のアジア・コンファレンスです。

富山大学極東地域研究センターからも“Managing Chinese Migrants in the Russian Far East”と“Migrants and Home across Border in Central Asia”の二つのパネル提案をし、ロシア、フィンランドの研究者の協力のもとに実施しました。当日、大阪は猛暑で、寒い北の国々からの参加者には少々きつい気温でしたが、世界各国で同じユーラシア研究をする仲間たちと終了後に飲んだビールは最高でした。

彼らもまた、異国のの人にとっては風変わりなたこ焼などを恐る恐る食べ、すぐに笑顔に変わり、はふはふとほおぼりながら、研究談義に花を咲かせ、充実した滞在だったようです。おもてなしの心がいっぱいの運営スタッフのみなさんに心から感謝申し上げます。

(文責:堀江)

IV 北東アジア学術ネットワーク (Northeast Asian Academic Network: NAAN) の参加報告

北東アジア学術ネットワーク(Northeast Asian Academic Network)は、本センターと中南林業科技大学(中国・湖南省)、江原大学校産業経済研究所、同大学校経営研究所(韓国・江原道)を中核機関として、持ち回り方式で開催している研究コンファレンスです。

今年は 5 月 25 日に中南林業科技大学にて開催されました。「アジア太平洋地域のグリーンエコノミーとマネジメントイノベーション」を共通課題とし、当該地域の環境問題やイノベーション問題について研究報告および討議が行われました。江原大学校から 6 名、富山大学からは、経済学部 3 名、極東地域研究センター 3 名の研究者が、そして中南林業科技大学からは、学長をはじめ、研究者と学生約 200 人が参加しました。

当日の午前中には、全体会議が開かれ、計 6 名のゲストが講演を行いました。まず、オーストラリアのラ・トローブ大学の Harry Richard Clarke 教授が、不確実な環境における投資政策に対して、現実的に如何に選択が行われ、そしてその実現が如何に保証されるべきかについて基調講演を行いました。次に中南林業科技大学経済学院の客員教授で、湖南豊潤物流有限公司の会長である陳剛氏が実務家の視点から、中国のマテリアル市場での環境問題および対策について講演を行いました。



写真 4. NAAN の全体会議

その後、富山大学経済学部の小倉利丸教授が環境問題に関する基本的な考えについて、韓国江原大学校経営学院の Park Sang - Kyu 教授が、北東アジア地域のグリーンマーケティング戦略と持続的経済成長の関係について、中南林業科技大学経済学院の陳文俊教授が、湖南省のロジスティック戦略について、また富山大学経済学部の龍世祥教授が、「労働」と「厚生」といった市場経済の原

点から環境と経済成長の関係について、それぞれ講演を行いました。



写真 5. NAAN での報告の様子

午後には、グリーンエコノミーと、マネジメントイノベーションに関する 2 つのセッションに分かれ、コンファレンスが続けられました。江原大学から 2 名、中南林業科技大学から 3 名、そして富山大学からは、経済学部の中村和之教授、垣田直樹教授と私の 3 名が報告を行いました。主なイシューとしては、国際技術移転、日中韓の企業におけるイノベーション活動、中国のアセアン諸国に対する FDI、農村エリアの文化アメニティの空間的關係と観光産業、中国の伝統的な農産物の物流システムとグリーンサプライチェーン、中国の地域所得格差と環境・社会福祉との関係、中国の経済成長戦略などがありました。

(文責：馬)

V 地域研究四方山話(9)「ジャージャー麺」

数年前から、現地調査のため、同僚の今村弘子先生と金奉吉先生と、一緒に出張する機会が多かった。出身国の違う三人だが、チームワークが非常に良かった。出張中によく話題になるのはやはり「食」の違いだった。その中でも、どこの国のジャージャー麺が一番美味しいかという論争が最も激しかった。

今年の 5 月、セミナーがあり、その際、韓国の

仁川市で、先方の大学の先生に、「最も韓国らしいジャージャー麺」を勧められ、食べたが、実に美味しかった。その後、レストランの近くのジャージャー麺博物館を見学した。

ジャージャー麺は、遠い昔から中国の北部、特に北京地域で非常にポピュラーな家庭料理だ。中国語では「炸醬麵」と言う。文字通り、醬(大豆で醸造された一種の黄色い味噌)をいため(炸)てから、好きな具を加え、茹でたての麺に和えたもので、味噌の香ばしさと肉汁の旨みがあり、しかも安くて作りやすいため、庶民に好かれている。ところが、約百五十年前に、華僑が韓国に「炸醬麵」の作り方を伝えたところ、韓国人の口に合うように、醬(味噌)にキャラメルを加え、醬の旨みに甘みを絶妙に合わせ、現在では韓国の国民食になっている。さらに、日本に伝わってからは、唐辛子や豆板醬の辛みに、日本の味噌や砂糖を用いて甘みをつけ、和風のジャージャー麺に変身し、多くの日本人の好物になった。

技術移転と技術革新のプロセスは、時代とともに、形を少しずつ変えていくものだが、その本質のところは昔も今もやはり全く変わらない。

中国風



韓国風



和風



写真 6. 東アジアのジャージャー麺

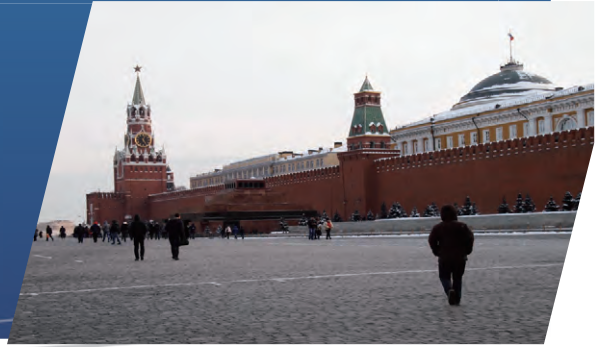
(文責：馬)

Call for Papers

Vol. 13, *Frontiers of Northeast Asian Studies (FES)*

Official Journal of the ANEARS

The *Frontiers of Northeast Asian Studies (FES)* has been the official journal of the Association of the Northeast Asia Regional Studies (ANEARS) since 2012.



Deadline for Submission
April 30, 2014

to be considered for the publication in vol. 13 of the FES printed in September 2014

Editorial Board

Chief Editor

Prof. Hiroko Imamura
(University of Toyama)

Board Members

Prof. Mikio Sakata
(Osaka University of Commerce)

Prof. Norio Horie
(University of Toyama)

Prof. Hideo Kojimoto
(Hirosaki University)

Prof. Masashi Yamamoto
(University of Toyama)

The Frontiers of Northeast Asian Studies, a leading general interest journal in North East Asian regional studies, publishes broad range of research in all relevant fields within this region, including, but not limited to, East Asian politics, environmental changes in North East Asia, political theory, international relations, economic analysis, comparative politics and public policy.

We are pleased to receive contributions from researchers all over the world. Please check the Instruction for Authors at the website for more details.

http://anears.net/ej/submission_info_e.pdf

Contact:

Professor Hiroko Imamura
Center for Far Eastern Studies,
University of Toyama
Email: henshu-e@anears.net

